

実録「細川の血達磨」の成立と浮世草子

——「金玉ねちぶくさ」と「男色大鑑」を中心に——

倉 員 正 江

一 はじめに

実録・歌舞伎・講談等に「細川の血達磨」と総称される作品群が、江戸期から明治期にかけて輩出した。「血達磨」の呼称が示すとおり、主君への忠義を全うすべく、割腹した男がその傷口に宝物を納めて無事焼失を免れる趣向が、その最大の眼目と言えよう。正徳二年（一七一二）京都布袋屋座上演の歌舞伎「加州かしゅう桜ざくら谷血達磨」（作者不明）が従来その嚆矢とされる。しかし「歌舞伎細見」七三「細川血達磨」の項目には「伝説の根拠は詳でない」とされ、「如何なる原材があったかは全然不明である」（近世実録全書）四解説とも言われ、以後もこの点に関しては言及がない。私見では浮世草子「金玉ねちぶくさ」（元禄十七年一七〇四）正月初版・宝永七年一七二〇九月再印／大本八巻八冊 章花堂著 以下「ねちぶくさ」と略す）巻之五の一「血達磨の事」が原拠であると思う。以下この点を中心に、実録の成立に浮世草子が深く関わっている点を考察する。

二 「血達磨の事」の内容

「ねちぶくさ」は元禄末から宝永期にかけて多出した、教訓臭の強い短編雑話集の一つである。著者章花堂については未詳であるが、「血達磨の事」も、本話の前後に武士に智仁勇忠の大切な事を強調する言辭が置かれ、主題を明示する。今それを省略して、本話の部分のみを引用する。細川幽斎時代の事件と設定されているが、「むさしあぶみ」の書名が出ることから、明暦の大火を意識していることは明らかである。

されば、細川幽斎公の御時、さる浪人兄弟、いづれも器量さかんなる仁物、当御家を望しかば、ある日御前へ召出され、「なんぢら二人、武芸はいかやうの事をかする」と、御たづねありければ、「何にても、事に臨んで人の得いたさぬ事を仕り、御用に相立申べき」よし申上る。幽斎、二人が骨がら勇あいなるを見給ひ、たのもしく思召、兄に四百石、弟に三百石つかはされしが、其後江戸の大火事の節、御上屋舖

へのほか、り、むさし鑑に書たるごとく、大風はげしく、猛火煙をまいてふせぎとめられぬに相きはまり、大事の御用の道具は悉く除しに、いかゞ仕たりけん、別して御秘蔵の達磨の絵のかけ物一ふく、御殿の床にかゝりしを、其まゝにて取わすれ、殊外おしみ給ひ、御きげんあしく見へたまへば、近習のめんくゝ手足をにぎり、「いまだ御てんへは焼か、り候まじ。兼て人の及ばぬ御用を達すべきよし申罷有候へば、彼新参もの二人に仰付られ、へんじもはやく取につかはされ、しかるべき」よし申上る。

ゆうさい、実もおほし召、彼兄弟を御せんへめされ、「今一度御屋しきへ行、若あやふからずば、取来るべし。しぜん御てんへ火かゝりなば、かならずさうく帰るべき」よし。二人は上意をかしくまり、息をばかりにかけ付て見れば、たゞ今御殿へもえ付ル体。うしろの門をのりこへて、ほのほけふりの中をくゞり、やうく御てんへ入ぬれば、屋根は一まいに、めう火なれども、いまだ下へは火ももれず。かのだるまの絵つ、がなく床にありしを、早速はづし、くるくゝとまき、羽織につゝみ出んとすれば、もはや十方焼ふさがり、終に二人はやけ死ぬ。

火しづまりてのち、さうく灰をのけさせ、彼死がいを見せさせ給へば、兄がてにかけ、弟の首を討、咽喉をくり、腸わたを引出し、彼かけ物を羽おりにまいて、其跡へおしこみつゝ、おのれははらを十文字に切、其口を引あげ、弟のむくろを我腹の中へおしこんで、いだし付て死し居たり。掛物を

引出し見れば、よくくゝはをりにまきしゆへ、絵にはのりもつかざりしが、左右上下の縁すこしづゝ血にそまれり。

誠に二人がいさぎよきしわざ、武士の鑑なるべきはたらしなれば、殊外御感あつて、絵よりは深くおしみ給ひ、血に染たる掛物を、わざと御しゆふくもくはへられず、かの兄弟が上下着て、此絵を守護するていを絵さうにうつさせ、ともに三ふく一對とし、細川の家の血だるまとして、御家の宝物となり、今に御秘蔵なざる、よし。

末尾に「細川の家の血達磨」の語が見えるように、本作が後の「細川の血達磨」物の鼻祖となつたことは疑えない。前述「加州桜谷血達磨」は、外題が示す通り加州桜谷家を舞台としている。実在の細川家を登場させないのは、演劇類の常套ではあるが、後出実録類では細川家を舞台としている。実録作者が「ねちぶくさ」を参照したことは明らかである。

三 「加州桜谷血達磨」と「ねちぶくさ」

「加州桜谷血達磨」は初演から六年後の享保二年三月に京都万太夫座で再演された。初演時の絵入狂言本（八文字屋八左衛門板以下「血達磨」と略す）と、再演時の評判記の記述（享保二年四月刊「野傾髪透油」京の巻／以下「髪透油」と略す）から窺える所を記す。

外題の「血達磨」に關連する箇所は第一番目である。桜谷家の総領主膳は悪人ゆえ、故殿は主膳妹春姫に婿を取つて相続せよと遺言、昔近衛院より賜つた達磨の掛物がなくては家督相続が出来ないという事情がある。その掛物を、主膳は自分と衆道關係にあ

る小姓越水奥三郎に盗ませる。善人の家老桐山衛門之介はこの計略を察知、奥三郎を切腹させ、達磨の掛物を腹中へ押し込めておく。掛物詮議の段になり、奥三郎死骸の腸の中より掛物を取出して開いてみると、血が付いて「血の達磨」となっていた、という趣向である。『髮透油』小佐川十右衛門（桐山衛門之介役）評に「三月節句より十日計して十五日より血の達磨、是六年以前大当の狂言……」とあり、初・再演ともに大好評であった。

戯曲全体としては、元禄歌舞伎の常套である御家騒動・廓場を踏まえて忠臣の苦衷を描いた作である。「血の達磨」一件については、一方が他方を切腹させ、掛物を傷口へ押し込むやり方から推しても、狂言作者が「ねちぶくさ」に取材したことは間違いないと考える。忠臣による御家の重宝の隠蔽工作という大義名分があるものの、やはり唐突な印象は免れない。何より切腹する奥三郎が悪人方の人物ゆえ、「ねちぶくさ」と同様の過激な行動が、当該人物への同情を喚起し得ない恨みがある。狂言本が梗概に過ぎない点を考慮しても、単なる珍趣向に終始した感は否めない。いたずらに血生臭い感のみが残るのである。長谷川強が、享保元年京早雲座顔見世狂言「龍都幾代之姉俵」に、宝の矢の根を悪人方に渡すまいと娘を殺してその傷口に隠す「血達磨的趣向」があつた事を指摘している。時好に叶つたものと見られよう。

また「歌舞伎細見」によれば宝曆四年（二七五四）江戸中村座の「百千鳥曲輪曾我」が、中村助五郎の小法師外記と佐野川市松の犬坊丸との衆道が描かれ、血達磨の狂言であつたという。詳細は不明だが、「血達磨」狂言が衆道と結び付いて脚色されていく

点は、後述の実録の成立に影響を与えた可能性がある。

四 実録「細川血達磨」の古態本

西沢一鳳は「伝奇作書」⁷⁾残編上の巻「浅草靈驗記大川が伝」に浅草觀世音の利生にて、印南数馬⁸⁾大川友右衛門と兄弟の約して父の敵横山図書を討つ話は、⁹⁾浅草靈驗記とて有、是を潤色して寛政九巳年五月（筆者注¹⁰⁾大阪）角の芝居にて興行す。印南数馬芳澤いろは、大川友右衛門尾上鯉三郎、横山図書村山儀右衛門……（中略）……男色の狂言珍らしく大当をせり、後文政十二巳年三月、又少しく増補して印南数馬風富三郎¹¹⁾、大川友右衛門中村歌右衛門¹²⁾にせしかど、今は男色廢りて歎ばす、さ迄当りもなかりけり（下略）

と記す。寛政九年五月初演の歌舞伎「浅草靈驗記」には先行する写本があり、歌舞伎はそれに基づくことを明言している。前章で述べた歌舞伎とは、直接の影響関係にないと見て差し支えない。この実録として、従来「近世実録全書」所収「大川友右衛門」¹³⁾（以下「全書本」と称する）が知られているが、この本は本文中に

……世に大川友右衛門の忠死を細川家の血達磨と称へ、歌舞伎又は講談師など往々演ずるにより、其事柄人の耳目に馴れ、自然一片の画幅の為に一個の忠士を亡なはれし如く思ふ輩らなきにしもあらず、开は大いなる過伝にして其実本書に著す如く、將軍家より細川家代々へ賜る所の領地の御朱印状なり、万一是を焼失させなば、何さま当家の浮沈に関する大事ゆゑ、此事然もあるべし、其品を同家重宝の画幅となせし

は、徳川家の御代の頃なれば白地に御朱印状なる事を云は、時の將軍家へ擲りあるが為に斯は作意しものならん、如何に代々秘蔵の品なりとも、僅かに一幅の古画の為に看々猛火の中へ家の忠臣を放ち遺るの理あらんや、仮令太守の命なりとも、斯る大諸侯にして、是を諫る一人の臣なき事有べからず、看客爰に鑑み給へ。

(大川友右衛門忠死の事#数馬大川名跡相續の事)
とあり、明治期になつてからの成立であることが明白である。そこでより古い形態の本に遡つて論じる必要が出てくる。江戸時代成立と見なされる実録は、所見本では

①会津若松市立会津図書館蔵『講敵討刃之奇談』(八卷合一冊十九章 六十三丁半丁八行/以下「会津本」と称する 末尾「于時明和九季秋 洛松静亭」の年記あり)

②酒田市立図書館光丘文庫蔵『敵討名残広記』(十三卷合三冊二十三年)の年記あり/国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる)

三章 百六十四丁半丁九行/以下「光丘本」と称する 末尾「文政十式年」の年記あり/国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる)
の二本である。会津本は年記から、少なくとも歌舞伎「浅草靈騷記」上演以前の古態を示している(と判断される。会津本の行文や巻割り・章立ては光丘本、全書本(巻割りなし、章題名は光丘本と近似、二十章)と相違し、総じて簡略であると言える。これに比して光丘本と全書本は極めて近い関係にある。論述の都合上長文にわたるが会津本に従つて以下に梗概を示す。

明暦年中のこと、横山図書なる竹内流の兵法者が、会津藩主保科正之に召出される。家中の信任を得た図書は、正之の媒にて奥

家老一ノ瀬九右衛門の末娘おいよと結婚して入婿となる。出入りの棚屋から備前祐貞の名剣を見せられ、「片ためし」の焼刃は崇るといふ舅九右衛門の忠告を無視して購入する。ある夜酒宴から帰宅した図書は、他人が妻の寝所に忍び入ると見て、件の祐貞にて斬殺、実は錯覚でおいよ本人を殺害した。図書が困惑する折節、息子の痲瘡平癒祈願に向かう勘定奉行伊南重内が通りかかる。重内を偽りだまし討ちにした図書は、妻おいよと重内の不義を申し立て、正当な妻敵討であると主張する。重内の妻お民の訴えも空しく伊南家は断絶、図書も殿様の媒にて娶つた妻を勝手に斬殺した科で所払いとなる。お民は幼児亀之助を連れ、重内の義兄浅草寺観音院浄覚のもとに身を寄せ、利発な亀之助の成長に期待をかける。一方図書は江戸で立花和泉守家中の兵衛指南にあり付き再婚するも、女の方から暇を乞うので離縁した。

観音院は熊本城主細川越中守の祈禱所で、美少年亀之助は殿様のお気に入り、名を須佐見数馬と改め、御小姓奉公が決まる。父の敵討ちを心掛ける数馬が浅草観音へ祈願の折、主君川越城主秋元但馬守の代参をする大川友右衛門が偶然見初める。思いの募る友右衛門は後日艶書を数馬の袂へ入れ告白、秋元家を辞し細川家に足輕奉公して袖助と呼ばれる。一廉の器量者の友右衛門は玄関番に出世、数馬との接触の機会を窺う。和歌の贈答により二人の関係は進展、密会の折数馬は父の敵討ちの事情を友右衛門に打ち明け、友右衛門も協力を約束する。ある日友右衛門を自室の衣裳入れの長持ちに隠したまま、高家役人の接待に出た数馬は、友右衛門の為にと懐中した菓子を思わず取り落とす無作法を仕出か

す。立腹した殿様より子細を尋ねられた数馬は書付にて白状し、友右衛門も悪びれず心情を吐露する。殿様は友右衛門の度量を見込んで改めて家臣とし、数馬を勘当の上友右衛門預かりの身とする寛大な処置をとる。元来才人の友右衛門は勘定奉行に出世、加増を賜る。友右衛門は病氣を理由に離縁された妹お菊を案じ、数馬にも姉として仕える様に頼む。

ある時細川家上屋敷裏手より出火、家康公より賜った家宝の御朱印を猛火の中に取り残すという一大事が出来た。日頃の恩に報いるべく友右衛門は火中に飛び込む。生還することが困難な状況を見極めた友右衛門は、切腹して腸を取出し御朱印を保護すべく腹中に納め、うつ伏せになって果てる。鎮火後友右衛門の死骸から無事御朱印が発見された。殿様は感涙に咽びながら、亡き友右衛門の家督を数馬に相続させ、さらに加増を賜る。

兄友右衛門の死を知らせた数馬に、妹お菊は意外な告白をする。お菊の先夫こそ重内を殺した図書で、今は立花和泉守家中に伊南姓を名乗る。図書が先妻を殺害した過去を知ったお菊は、恐ろしさのあまり暇を乞うが許されない。一計を案じ漆に半夏を加え酒に浸し顔に塗り、癩病に見せかけ離縁に持ちこんだという。父の敵の居場所を知った数馬は悦び、保科・細川両家に事情を届け、図書を立花家より召還し、自分も故郷会津へ下る。数馬は図書に勝負を挑んで勝利、三百石を賜り細川家の家臣として末代まで栄えた。

会津本は冒頭

五風十雨も時をたがへず、治国平天下の時にあふては、四民

(以上梗概)

枕を高ふし、誠に戸ざ、ぬ御代なれや、末世なりといへ共神
仏の守りなんぞむなしからんや、丹せいをぬきんずる輩に於
ては古今変る事なし。

と始まり、末尾には

……秋の永夜の物語伝へくて悪をしりぞけ善にす、むのふ
みだんにもと筆を留ることしかり

とあり、浅草観音の靈験に触れる文言がない。もつとも会津本に
浅草観音の靈験に言及するところが皆無というわけではない。巻
之四の一「伊南亀之助細川越中守殿江召出さる、事」冒頭に

抑江戸浅草寺は関東の大寺にて、諸大名御旗本衆の御位牌を
預り奉り、日夜参詣のとだへなく、実靈げんあらたなり。

とあるのだが、観音院が細川家の祈願所である事を説明する文脈
に過ぎない。これに対し光丘本、全書本共に文章は多少異なるも
のの、本文冒頭・末尾に浅草観音の御利益を強調している。光丘
本五の一には、数馬(亀之助)の母が病死する際、敵討ちのため
に神仏の加護があるべく観世音を明くれ祈るように遺言する場面
が描かれる。会津本でも、母は数馬に敵討ちを託すが、浅草観音
を信仰せよとの文言は一切ないのである。さらに光丘本、全書本
ともに会津本にない章が本文中に付加されている。このこと自体
は実録成長過程の常ではあるが、その中でも特徴的なのが「伊南
数馬靈夢を兼る事」友右衛門再び数馬へ艶書を送事(光丘本七の
二)、「数馬再び靈夢を兼る事」友右衛門が妹悪病を煩ふ事(光丘
本十の二)の二章である。前者は、数馬が浅草観音の御名を唱え
てまどろむと「貴げなる清僧」が現われ(全書本には観音の御声の

み、父の敵討ち成就の験しがあるにも関わらず、それを悟らずかえって禍いと思ひ込む数馬に忠告をする。この示現が、数馬が友右衛門の思慕を受け入れ、義兄弟の盟約を結び、友右衛門も敵探しに尽力する端緒となる、という展開である。後者は敵の探索に悩む数馬のもとに再び貴僧が現われ、三日のうちに大願成就する便りありと諭す。これは妹お菊を見舞った友右衛門が、その告白からお菊の先夫こそ数馬の敵圖書であることを突きとめることを指す。敵討ち成就の背後に、浅草観音の靈験を強調する展開は、会津本には見られない要素である。

前掲「伝奇作書」の記事は、歌舞伎に先行する「浅草靈験記」名の実録の存在（存否未詳）を示している。故に「浅草靈験記」上演以前の实録の成長過程において、既にこの靈験譚的要素が付与されたと考えられる。光丘本の書写年次が歌舞伎「浅草靈験記」等上演の後である以上、これをもつて歌舞伎の素材になった実録の内容そのものであるとは断定できない。しかし古態の会津本から判断して、本来浅草観音の靈験とは無関係に成立した実録であることは間違いない。数馬と友右衛門の出会いの場が浅草観音であつた点から、その靈験が強調されるに至つたのであろう。

五 会津本の素材としての「男色大鑑」

会津本執筆の際に、作者が典拠とした作品を考えてみたい。まず最大の趣向「血達磨」は、前掲「ねちぶくさ」を典故と見て間違いない。主君の恩に報いるべく火中に飛び込み切腹して家宝を守る、といった大筋が一致する。「達磨の掛物」が「御朱印」に

変えられたのは、御家の存亡に関わる重宝である事を強調する意図であらう。

もう一つ本書の特色といえるのは、この数馬と友右衛門の衆道である。前掲「伝奇作書」に、初演時には新奇さも手伝つて好評を博したとある。衆道は特に近世初期に流行したもので、明暦寛文年間という時代設定には恰好の趣向であつた。この部分に関しては、西鶴作「男色大鑑」（貞享四年（一六八七）刊）卷三の五「色に見籠むは山吹の盛り」（以下「山吹の盛り」と略す）を典故として指摘できる。なお本作は「ねちぶくさ」卷三の二「城の伊織の介が事」の典故でもあり、会津本作者もその点には気付いていたものであろう。後に考察する様に、典故としては二作品ともに利用しているのである。「山吹の盛り」は奥川主馬と田川義左衛門の衆道を描く。梗概を次の段落に示す。

田川義左衛門は血氣盛んな若侍、目黒不動に参詣の折美少年を見かける。大名の寵重らしく供の者を大勢連れ、津山藩邸に帰つて行つた。辻番に尋ねると奥川主馬なる御小姓と知れた。主馬に心を奪われた義左衛門は暇乞いをして浪人となり、江戸を出発した津山藩主一行の後をつけた。途中主馬も義左衛門の気持ちに付き始めたが、帰国後進展はなく、義左衛門は天秤棒を担ぐ生活に身を落す。参勤交代で江戸と津山を往復する主馬に付いて歩き、義左衛門は零落して乞食となる。ある時主馬は若党に刀の試し切りのためと称して、乞食姿の義左衛門を部屋へ招き入れた。様々にもてなした後、素姓を尋ねる主馬に、義左衛門は自らの恋文を差し出す。その思いを感じた主馬は、殿の御前で男色の一分

を立てるためとお手討ちを願ひ出る。主馬は閉門の後に許され時服と金子を拝領、義左衛門も江戸に送還と決まった。義左衛門は途中大和葛城山付近に隠遁し、静かな余生を送った。

本話前半部の、偶然見かけた相手に執心して身辺で機会を窺う義左衛門の様子は、貞享二年刊「西鶴諸国はなし」巻四の二「忍び扇の長歌」に登場する、大名の姪に恋慕する男を想起させる。この二話を撮合したものが前掲「城の伊織の介が事」であろう。長尾謙信の寵童城の伊織助を恋慕する菅半助を直江山城守の若党とし、つてを求めて伊織助方に髪結奉公をする設定である。身分の低い者が奉公に有り付き機会を窺う点や、謙信の勳気を蒙った伊織助の切腹等は「忍び扇の長歌」から着想したと見られる。伊織助が半助を刀の試し切りにするというのは「山吹の盛り」の剽窃であろう。西鶴作の影響が濃厚な作と言えよう。

会津本の典拠という点から見直してみると、「山吹の盛り」の影響は少なくない。奥山主馬が伊南数馬に、田川義左衛門が大川友右衛門に相当することになる。先ず友右衛門の人物設定である。会津本に「才智弁舌人に勝れ、武芸は一家中に並ぶ者なし。知行三百石領し君の御覚も浅からず別して御寵愛也」と、忠死を遂げる最期と呼応させるべく「廉の人物とする。「生質の美男なれ共」という表現も見られる。「山吹の盛り」にも義左衛門の美形ぶりが強調され、浪人するも「首尾よく、間もなく、先知六百石にて済みぬ。思ひのま、なる春をうれしく……」と何不自由のない状況が描かれるのに着想していよう。恵まれた環境にいながら寺院参詣の折に偶然目にした美童に惹かれ、その奉公先を突き

止めて自ら主君に暇乞いするのも、両者に共通している。若衆の方が相手の執心に気付き、自分の部屋へ招き入れてやる点、お手討ちを覚悟の上若衆の方から念者の存在を主君へ言上する点、何より二人の関係を知った主君が、その心意気に感じて寛大にも許す点も共通している。この場面で「山吹の盛り」には「有難さ、いつの世にかはこの御恩はおくるべし」と、義左衛門が主君に感謝する言辞が見られる。これを友右衛門の場合は「此御厚恩には下郎めが一身ぢんがいよりも猶かろし。御奉公勤候はん。」とし、この言葉が後に火中に飛び込む行為の伏線となっている。ここまで類似点がある以上は、「田川義左衛門」の名が「大川友右衛門」命名のヒントになっていると考えるても許容されるのではないか。無論家名「細川」の連想から「大川」姓が連想されたことは否定できない。

また「城の伊織の介が事」をも参照したと見られる箇所がある。友右衛門が足輕奉公に身を落して数馬に艶書を渡す機会を窺う点は、「山吹の盛り」よりも明らかにこちらに近い。また「山吹の盛り」にはない描写として、伊織助が「恩をあたへ、賞を施して、我領地にもかへまじき程に愛し給へり」と、主君の寵愛を集め、

一国の人民貴となく賤となく、老となく若となく、愚となく智となく、男となく女となく、一度此人のかたちを見しものは、れんぼのおもひに胸をこがし、かなはぬおもひに胸をこがし、かなはぬ恋に死をあらそふ。

と、万人に愛される様子が挙げられる。会津本に「数馬は越中守

横御寵愛日を追て浅からず、昼夜御側を放し給はず、三千の覚へ一身に留めけり」とあり、「ちまたに行かふ貴賤男女見返らぬ人もなく心をうごかす人多かりける」との記述がある。こゝは文章自体は異なるものの、「城の伊織の介が事」の影響を受けたと見られよう。

六 その他の典拠と浮世草子

会津本には他にも浮世草子に着想したのではないかと思われる点が多い。友右衛門の妹お菊が因書に離縁されるため、わざと面体を醜くする箇所がある。そこで

うるしに生半げをくわへ、酒にひたし顔にぬれば癩と成とのおしへに任せ、薬を調へぬりたれば、此如く癩病人となり望の如く暇は取たれ共、此様成病にて人の付合いもならぬ身なり。

と、癩病の如く見せかける件がある。これは宝永八（正徳元年）年刊「傾城禁短氣」（江島其碩作）巻三の三にある女の手管に扱ると思われる。漆職人の間夫を持つ茶屋女が、ある大尺の身請けを嫌い、わざと顔を漆かぶれさせ、梅毒と見せかけ飽かれて主人をも騙して暇を取る。これは間夫の入れ智恵で、生きた蟹の汁と餅米を混ぜて塗ると、漆かぶれが元通りになる（民間療法として周知）という段取りである。主人の敵討ちのため漆を身体に塗って癩病に見せかけたという予讓の故事（「史記」「刺客列伝」・「粟求」「予讓吞炭」）に直接着想した可能性も否定できないが、本来美人であつた者が、男に飽かれるために一計を案じる趣向から、「禁

短氣」よりの撰取と考える。「禁短氣」なる作品は、前掲「伝奇作書」初編上の巻「八文字屋自笑の伝」で「八文字屋本」の筆頭に挙げられ、拾遺下の巻にも「自笑其碩が合作傾城禁短氣の中より幾らか歌舞伎狂言の筋は出たり」と記される。狂言作者と実録作者の感覚を同一視することは早計との見方もあるが、興味深い趣向に満ちた作として長く記憶されたことの一証になる。

また会津本冒頭に事件の発端となる「妖刀」備前祐貞（祐定を指すのであろう）が出てくる。本来は人望の厚かつたと書かれる因書が、これを入手したのために落ち度のない妻を殺害に及び、後悔するという展開である。これに関しては、宝永六年刊「武道張合大鑑」（北条团水作）巻二の四「吟味すべき差料の剣」（以下「差料の剣」と略す）が、この種の「妖刀」を扱った作の早いものとして注目すべきであろう。道成寺伝説に関連させた話で、真砂の庄司の子孫真砂新之丞は乱氣して脇差にて家族・奉公人を皆殺しにして自害、真砂家は断絶する。この脇差は寺に納められ、住持が不吉な事情を説明したにも関わらず、ある寺侍が望んで譲り受ける。これを差して盆踊りに出かけた際、ふとした聞き損じから堪忍ならず、無差別に十七人を殺傷して斬罪にあうという話である。末尾に

評に曰く村政の太刀を世に嫌ふ事も。かゝる不吉のおほかりし故とかたり伝へたり。五性に応じて焼刃の直乱れの相剋もあれは吟味を迷て指料にはすべきか。

との評語が付され、「徳川実紀」に記される徳川家康が村正を忌んだという「妖刀」説が、この時点で有名であつた一証となる。

この「差料の剣」と会津本当該箇所類似点としては、次の点が挙げられる。まず不吉な刀であると他人から忠告されながら、その見事さに惹かれて所持すること、その結果不本意な殺人を犯すこと、また焼刃をよく吟味して帯刀せよというコメントである。会津本では、刀の目利き巧者な舅が刀を見て「此刀は焼刃片ためしと申て疵物にて、此刀を差料にする時は其持主へ崇ると申伝へ候間、御指料ならば御無用に可被致」と凶書に忠告する。名作に惹かれた凶書は結局刀を購入し、妻にも「焼刃悪敷持主に崇るとの仰なれ共……」と事情を説明する箇所がある。焼刃の悪い刀は崇るといふ発想は、前掲「差料の剣」からの着想と見てよいのではないか。

凶書が妻を轆轤首であると言つて重内を欺く点は、両者が一廉の武士同士であることを思えば、少々噴飯物である。轆轤首の説話自体は中国にもあり、『和漢三才図会』巻第十四に載るなど珍しいものではない。其破作「善悪身持扇」(享保十五年刊)下巻二「重来強じて尼に成」は、間抜けな男が意外にも美人の女房を持つたことに愠氣した悪友が、女房が実は轆轤首であると男に告げると、男が真に受けたことから騒動が起こる話である¹⁰。この轆轤首という虚言で他人を欺く点が、ヒントになったと見る事も出来よう。ただしこうした部分的な趣向については、先行する演劇類にも存在した可能性を否定できず、浮世草子に付会しているとの批判も覚悟している。なお今後とも類話の探索に努めるべきではあるが、典拠の可能性のあるものとして指摘しておきたい。その他、幼い遺児に父の敵討ちと家の再興を託して養育する母

親の艱難辛苦に関しては、実際にも容易に想像できる状況であり、典拠を特定できる性格のものではない。父の敵討ちを狙う若衆に念者が同情して助力するという点も、同様であると考える。

七 伊南図書のモデル——軍学者伊南芳通

数馬の父を殺害する敵役横山図書は、楠流の一派河陽流を伝えた実在の軍学者伊南芳通(寛永四年(一六二七)―享保二年(一七一七))がモデルである¹²。実際の芳通も会津藩に仕えて「凶書」と称しており、横山図書が後に伊南図書と名乗る点からも、作者は明らかに芳通を意識している。横山が本来は一廉の人物として、会津藩主保科正之の信頼を得たという設定も、実際の芳通像の反映が見られる。無論妖刀による殺人事件などは全くの無関係である。刊行された芳通の著作は「甲陽軍鑑評判」(承応二年(一六一五三)序刊)と「統太平記狸首編」(貞享三年(一六八六)刊)の二作があり、どちらも軍書としてかなり行われたものと見て差支えない。しかし二書ともに「伊南図書」なる署名は見られない。芳通は会津藩内の子弟の教育にも尽力し、以後会津藩ではほぼ天明八年(一七八八)まで、つまり会津本成立時点では河陽流を採用していた。伊南図書なる呼称は、会津藩に伝わった河陽流の祖として記憶されたものであろう。芳通の曾孫芳紀までは、軍学者として名を残している¹³。この一事から会津本の作者が会津藩関係者であるとは言えないが、芳通が没後も長く軍学者として記憶されていたことの証明となる。

八 会津本から光丘本へ

以上会津本の典拠という観点から、主として浮世草子の影響を指摘した。次に会津本から光丘本への改変について考察したい。

最大の特徴は、前述の如く浅草観音の靈験譚として首尾一貫させたことである。光丘本末尾の「浅草観世音の御利益なりと難有かりし事どもなり。」の文言がこの点を強調している。神仏の靈験が伴う敵討ちは実録等では珍しいものではない。⁽¹⁴⁾

また、友右衛門が数馬の敵横山図書の搜索に貢献する度合いが、光丘本では増大している。会津本では、友右衛門は妹お菊の前夫が横山図書であるとは全く知らずに火中に死ぬ。その死後数馬がお菊を訪ねた際、偶然父の敵の所在を知る。あくまで数馬一人でこれに立ち向かうという展開である。これに対し光丘本では以下のような増補がある。数馬は友右衛門のもとで剣術の稽古に励み、敵討ちの機会を窺う。友右衛門はお菊の告白から、前夫が立花家中の「伊南図書」なる軍学者であると知る。数馬と同姓ゆえ氣に留めた友右衛門が数馬に問い質すと、数馬も「伊南の苗字は稀にして、父の一字を親類にも名乗者は無御座候」と言う（十の二）。この「伊南」姓に拘る発想は光丘本の改変で、会津本では当初数馬が「須佐見」姓を名乗るが、光丘本では「伊南」姓を名乗っている。これが端緒となり、友右衛門は立花家中の知人中村軍兵衛に頼み、図書と対面する場を設け知己を得る。さらに図書の面体を知る会津藩の知人中西三郎兵衛に事情を話し、後日数馬も同席した宴席の折に襖の陰から図書を中西に覗かせる。中西の

証言から本人に間違いないと分かり、敵を眼前にした数馬は逸る。友右衛門は当時の事情を質してからにせよと宥め、一旦は散会する（十一の二）。友右衛門は何を便りに詮議すべきかと迷ううちに、例の大火が起こる、という展開である。友右衛門と数馬の念契の深さを強調していると言えよう。

これと関連して細川侯の寛仁大度を強調する潤色も顕著である。細川侯が数馬を勸当して友右衛門に預ける際、会津本では「我思ふ子細有は」としか説明されていない。光丘本では、数馬が親の敵討ちの望みあるを知る細川侯が、数馬が友右衛門から剣術兵法の指南を請けるために「御仁情」を示したものと描かれている。本作品の最大の山場である、友右衛門忠死前後の場面描写もより詳細になっていくのは当然の成り行きであろう。会津本では友右衛門が火中に飛び込む際、「数馬が御勸氣御赦免の願ひ」と言上するのに対し、細川侯は「此大事を相勧る其方が願の事救し、若汝が今日命は終る共」数馬に家督を継がせるから、「片時も急ぎ候へ」と仰せられる。火急の際の大役とはいえ、家臣の方から交換条件の如き依頼はやや僭越な感がないではない。細川侯も安心して死ぬとばかりに友右衛門を急かすのみである。これに対し光丘本では友右衛門は「さて恐有御願三候へ共、数馬が身の上御れんみん加へ下らば生々世々の御厚恩難有奉存べし」と言うに止まり、細川侯も「汝かならず命をかるんずることなかれ」と言い、あくまで無事生還する事を強く求め、「死」を口にしない（もともと前掲「ねちぶくさ」でも、幽齋は兄弟に無理を強いはいないが）。実録とは言え太平の世の読者を想定すれば、武士の死と言

えども必然性が乏しければ説得力がない。そうなれば左右衛門の激烈なまでの忠死が、単なる荒唐無稽な茶番劇に墮す可能性もある。君恩に報いるという設定である以上、細川侯の寛大さを最大限に強調する必要がある。この点が一番実録作者を腐心させた所であろう。その試みは成功したと見てよい。

九 終りに

実録の成長過程は様々であり、パターン化する事自体にあまり意味はないというのが私見である。例えば従来実録の第一段階——原始形態——は、おおよそ史実に基づく記録的な、あるいは記録性が残存するものと一般に考えられている。勿論この見解を否定するものではない。ところが「細川の血達磨」の場合は、発生当初から浮世草子を素材とした創作である点に注目したい。増補改変も、単に忠義を強調するといった教訓性に止まらず、主人公の過激な行為を人情の発露として読者に納得させる方向でなされている。前掲「伝奇作書」下の巻に「狂言の筋は八文字舎本に有り」の項があることはよく知られる。「八文字舎本」はこの場合、「浮世草子」と同義語である。これは実録作者にとつても同様であり、浮世草子は素材の宝庫であった。この点は今後とも追求すべき問題である。歌舞伎・講談を含む「血達磨」物のその後の展開については、稿を改めたい。

注(一) 飯塚友一郎著 大正十五年初版、昭和二年増補版 第一書房刊。

(二) 坪内逍遙鑑選 昭和四年 早稲田大学出版部刊。

(3) 「ねちぶくさ」の引用は叢書江戸文庫34「浮世草子怪談集」(木越治校訂 一九九四年 国書刊行会刊) 所収本文による。

(4) 「元禄歌舞伎傑作集」下(高野辰之、黒木勘蔵校訂 大正十四年早稲田大学出版部刊) 所収。挿絵中にも「おく三郎がしが」(「ちのだるま」あもんの介だるまみせ)「小佐川大でけ」等と、血の付いた掛け軸を掲げて見せる姿が描かれる。

(5) 引用は「歌舞伎評判記集成」六(昭和四十九年 岩波書店刊) 所収本文による。

(6) 「浮世草子の研究」第三章第一節「歌舞伎の影響」にて指摘(昭和四十四年初版 桜楓社刊)。

(7) 引用は「新群書類従」第一(明治三十九年 国書刊行会刊) 所収本文による。この前項一同(けいせい伝授) 古今伝血達磨の話——に、達磨の一軸は実は古今伝一軸であるとの説を掲げる。

(8) この箇所は光丘本にはなく、明治期の加筆であることを裏付けている。同様の表現は本文が光丘本に近似する「今古実録名画血達磨」(明治十八年刊) にも見られることを付記する。

(9) 引用は古典文庫「北条团水集」草子編第二巻(野間光辰・吉田幸一編 昭和五十五年) 所収本文による。

(10) 本語は西鶴作「懐硯」三の一、八文字屋本「分里艶行脚」一の五を經ている。ただし二話ともに女房の病を癪癪としている。

(11) 轆轤首との虚言で女に悪名を立てる点では、大岡政談の小西屋嫁入裁判(「てれめん」とも) が想起される。これも浮世草子の影響が考えられよう。

(12) 拙稿「兵学者伊南芳通と『統太平記狸首編』——通俗軍書に見る當代政治批判」(『近世文藝』70 平11・7) 参照。

(13) 小島一男著「会津人物事典(武人編)」(平成五年 歴史春秋出版刊) による。

(14) 菊池庸介「田宮坊太郎物実録考」実録の生長に関する一試論——(『近世文藝』70 平11・7) に扱われた「金毘羅利生記」系の実録は、先行例として参考になる。おそらく創作された敵討ちに靈驗譚を後から付加する方法も、類似のものと思われる。